

広田 純先生記念号によせて

広田 純先生は、1954年3月に東京大学大学院経済学研究科を修了された後、55年4月に本学経済学部にて専任講師として迎えられ、以来91年3月に定年退職されるまで、36年の長きにわたって本学ならびに経済学部の発展に尽力され、学問の府としての本学の名声を大いに高められました。

先生は経済学部において統計学の講義を担当されて多くの学生の教育にあたられるかたわら、ゼミナール・大学院における研究指導により、外国人留学生も含めて多くの研究者の育成に努められました。この間、1975年4月から77年3月まで経済学部長兼大学院経済学研究科委員長、立教学院評議員を歴任され、本学の教育・研究の充実・発展のために力を注がれました。

先生の研究業績は、統計調査論、推計学批判、国民所得論、生産的労働論、剰余価値率の推計、統計学の学問的性格論等多岐にわたっており、ドイツ社会統計学を批判的に摂取した日本の社会統計学の発展に大きく貢献されました。その第一は、英米流数理統計学の限界を内在的かつ詳細に明らかにされたことであります。1957年の「計量経済学批判」は、今日でも社会統計学の基本文献のひとつとなっております。こうして、統計学＝普遍科学方法論説を退け、先生は、社会科学に基礎をおく統計学＝社会統計学の発展に全力を尽くされることとなります。先生の貢献の第二は、社会科学に基礎をおく統計的研究とはどうあるべきかを、国民所得概念ならびに国民所得統計の研究を通じて具体的に提示されたことであります。そして、これにより、ともすれば抽象論議に陥りがちな統計学の学問的性格論に、先生は具体的肉付けを与えることに成功されました。さらに、第三に、統計利用論の分野でも、先生のお仕事は先駆的な業績として評価されております。「国民所得統計・産業連関表によるわが国主要産業の剰余価値率の推計」がそれであり、これは広田方式として知られ、統計利用論の基本文献のひとつとなっております。このように、自然科学のデータとの違いを常に意識され、社会集団現象を語る統計の質（信頼性、正確性）を一貫して問題にしてこられたところに、先生の研究の特質があるということが出来ます。

先生の学会における活躍もまた、目覚ましいものであります。経済統計学会、日本統計学会、経済理論学会、経済学史学会、社会主義経済学会に所属し、多くの領域における研究の発展のために活躍されております。とりわけ統計学の領域では、経済統計学会で全国運営委員を長いこと務められ、学会への学問的貢献ばかりでなく、運営面においても大きく貢献してこられました。また、スト権ストの損害賠償裁判では、損害額算定資料を作成して裁判所で証言されるなど、統計学者としての社会的活動にも積極的に参加してこられました。

このように先生は、わが国の統計学界において目覚ましい活躍をされ、大学としての本学の権威を一層高めることに多大の貢献をしてこられました。

立教大学は、先生の学術上、教育上の功績の顕著なことにより、1991年7月、先生に名誉教授の称号を贈りました。

先生はいま定年退職の時期を迎えられましたが、経済学部的发展に尽くしてこられました先生のご功績を永くとどめるために、本号を先生の記念号といたします。

先生の今後のご健康とご活躍を祈念すると同時に、これまでと変わらぬご助力を本学と経済学部のために賜りますようお願いいたします。

1991年11月

経済学部長 丹羽克治